

幼稚園・こども園における幼児の身体活動に関する研究

多胡 綾花^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

運動あそび研修会参加者へのアンケート調査により、幼稚園・こども園における子どもたちの身体活動状況や幼児期運動指針の実践について明らかにし、幼児期運動指針の普及や実践にむけて、養成校での運動あそびを取り扱う授業や授業内容について検討する。

【キーワード】

幼児の運動あそび 保育内容「健康」 保育者養成

1. はじめに

毎年「体育の日」を前に、スポーツ庁より体力・運動能力調査が発表される。平成28年度体力・運動能力調査の結果は、7, 10歳男子と9, 12, 13歳女子に加え、60～64歳男性と75～79歳女性で体力テストの成績が現行方式の新体力テストで最高になるなど、「子どもと高齢者の運動能力の向上」が報道されて話題となった。体格が良くなったことや健康志向の高まりにより、体力水準が高かった昭和60年代頃には及ばないものの、現行の新体力テストの推移の中では現状維持や改善傾向が見られた¹。

また多面にわたるスポーツの価値について、より深い分析を目的とする質問調査によって、幼児期によく外遊びをしていた子どもほど、小学校に入ってから体力得点が高く、現在の運動スポーツ実施状況が高いということが明らかになった²。

就学前の幼児期の運動や戸外あそびの重要性がますます示された形である。

2012年に文部科学省(2012)が「幼児期の運動指針」を公示し、幼児期の運動や身体を動かすあそびの指針が示された。それまでは田中(2010)が報告したように、幼児期に身体を動かすことは必要と考えている保育者が有意に多いが、どのような頻度でどれくらいの時間、どのような質の運動が必要か知らないと答える保育者が半数以上占めていた。具体的にどのような体を動かすあそびを取り入れるか、運動あそびの指導内容や方法についての理解が保育現場や幼児教育現場に浸透していなかったのである。指針公示から5年経った現在、子どもたちの状況はどう変化したか、また保育現場や保育者の意識は変わったのか。保育者にアンケート調査することによって、保育者から見る子どもの身体活動の様子や体を動かすあそびの実施状況を明らかにしたいと考えた。そこで、

2017年8月にK県の体育センターで行われた運動あそび研修に参加した現役の幼稚園教諭・保育教諭25名にアンケート調査を行った。この結果を保育士・幼稚園教諭育成の授業内容に活かしていきたい。

2. 研究目的

本研究は、幼稚園やこども園に勤務する現役幼稚園教諭25名を対象にアンケート調査を行い、幼稚園・こども園における子どもたちの身体活動状況や幼児期運動指針の実践について明らかにし、養成校における運動あそびを取り扱う授業や授業内容について検討する基礎資料を得ることを目的とする。

3. 研究方法

1. 調査方法・対象・時期

① 方法 質問紙調査法

体を動かすあそびに関する9設問、「幼児期運動指針」に関する8設問、体を動かすあそびの実践に関する2設問について、「とてもそうである」・「そうである」・「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」の4段階で回答してもらった。

「子どもたちの体を動かしてあそぶ様子や体力低下や運動能力について、日々思うこと」や「園で子どもたちの体力づくりのために特別に実践している取り組み」、「小学校への円滑な接続にむけて、体を動かすあそびについて、工夫している点や取り組んでいること」、「体を動かすあそび実践上の課題や問題点」について、自由記述で記入してもらった。

② 調査時期 2017年8月（K県）

③ 調査数

有効回答25名（配布数30枚）

K県体育センターが企画した運動あそびの研修会に参加した参加者30名に調査票を配布し、欠損データがない25枚を本研究対象とした。

④ 倫理的配慮

研究協力者に書面と口頭により、研究の目的と方法、意義を示し、研究への参加は強制ではなく、自由であること、得られた情報は研究以外の目的で使用しない旨を説明し、同意を得た者にだけ実施した。

4. 結果と考察

(1) 対象者の属性

本研究で対象となった保育者は、表1の通り、男性3名、女性20名、無回答2名、合計25名であった。勤務先は、表2の通り、公立18名、私立7名であった。県企画の研修会であったということで、公立園に勤務する保育者が多かった。勤務園は、図1の通り、幼稚園18名、こども園7名で、約7割が幼稚園であった。保育所はなかった。

表1 性別

勤務先	人数
男性	3名
女性	20名
無回答	2名
合計	25名

表2 園について

勤務先	人数
公立	18名
私立	7名
計	25名

次に勤続年数は、図2の通りである。「1-5年」が12名で一番多く、「11-20年」（5名）、「6-10年」（4名）、半数が11年以上の保育者であった。勤続年数平均は「9.818年」であった。担当クラスにつ

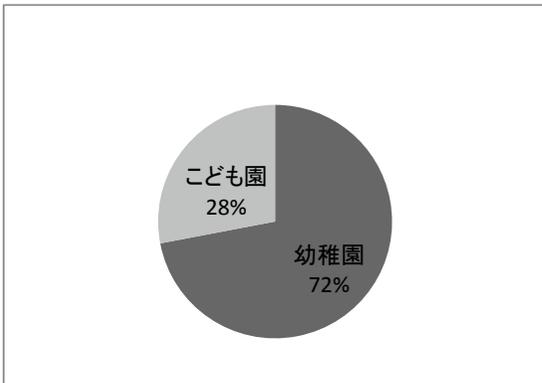


図1 勤務先の内訳

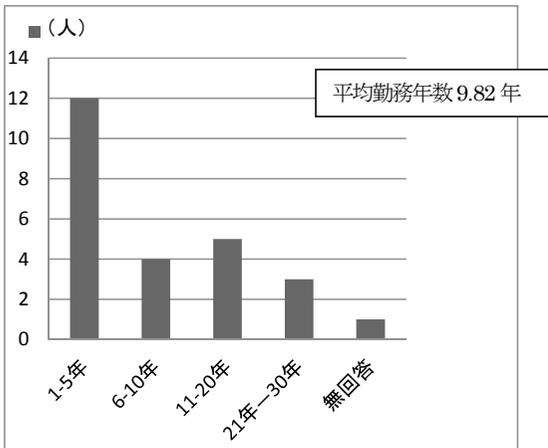


図2 勤務年数度数分布

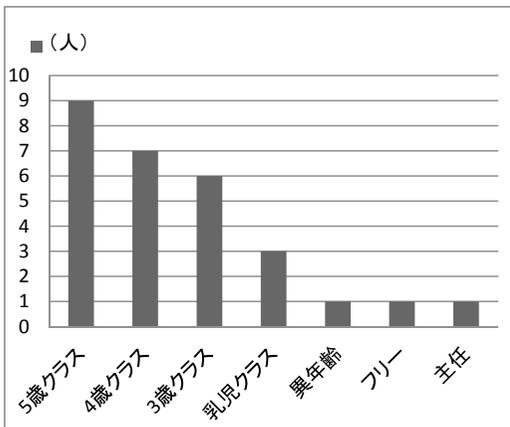


図3 担当クラス

いては、図3の通りである。「5歳児クラス」の担当者が最も多く、「4歳児クラス」、「3歳児クラス」の担当者と続く。こども園所属の保育者もいるため、「乳児クラス」担当者や「主任」や「フリー」、「異年齢クラス」担当の者もいた。

(2) 子どもたちの状況

子どもたちの状況について、各設問の結果をグラフにまとめた。

図4のように、設問1「子どもたちは進んで体を動かして遊びますか?」には、96%の保育者がそう感じると回答した。図5のように、設問2「子どもたちの体力低下を感じることがありますか?」には、72%の保育者がそう感じると回答した。図6, 7のように、設問3の「活発な子どもと不活発な子どもの二極化を感じることがありますか?」、設問4「疲れやすい子どもが増えたと感じることはありますか?」には、80%の保育者がそう感じると回答した。図8のように、設問5「怪我をしやすい子どもが増えたと感じることはありますか?」には、64%の保育者がそう感じると回答した。図9のように、設問6「生活リズムが乱れている子どもが増えたと感じることがありますか?」には、84%の保育者が賛同しており、「とてもそう思う」と回答した保育者が32%いた。図10のように、設問7「猫背や背骨の歪み、姿勢保持ができない子どもが増えたと感じることがありますか?」には、84%の保育者がそう感じると回答した。図11のように、設問8「家庭において、体を動かして遊ぶ子どもが減ってきていると感じることがありますか?」には、76%の保育者がそう感じると回答した。一方、図12のように、設問9「体を動かす遊びについて、保護者の理解や協力が得られないと感じますか?」は、44%の保育者がそう感じると回答したが、56%の保育者が当てはまらないと回答し、半数以上の保育者が家庭の協力

や理解を得られ、体を動かす遊びを実践できていると分かった。

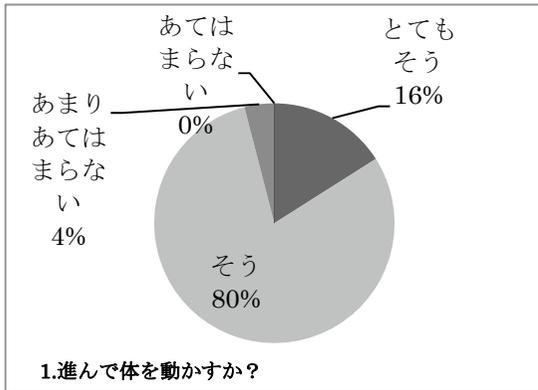


図4

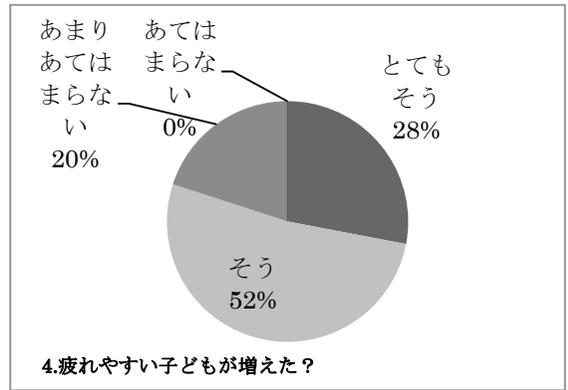


図7

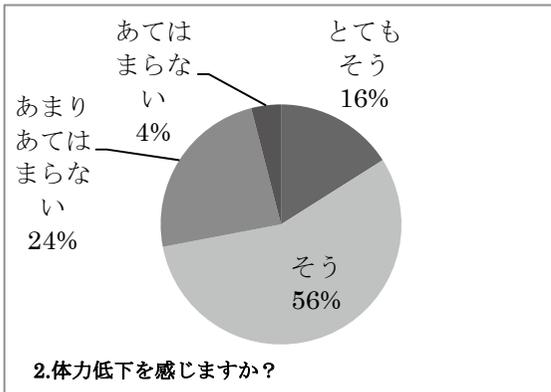


図5

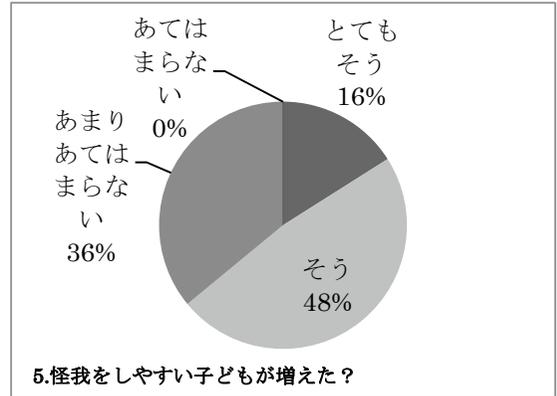


図8

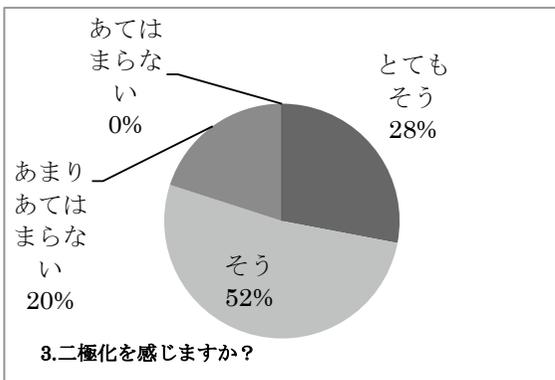


図6

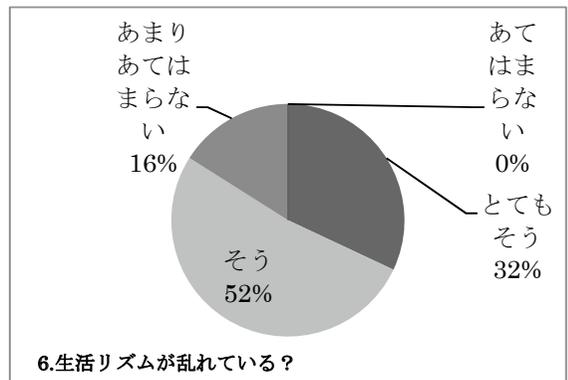


図9

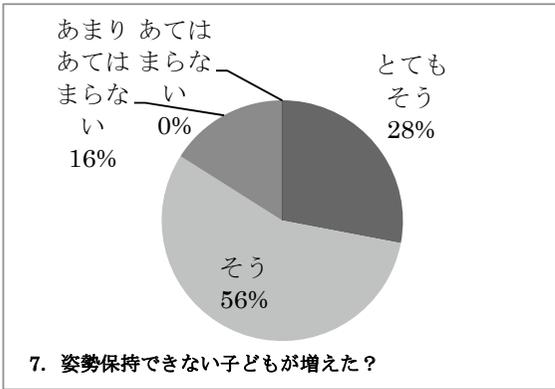


図 10

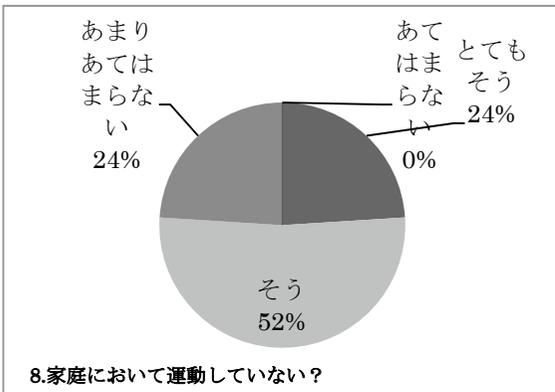


図 11

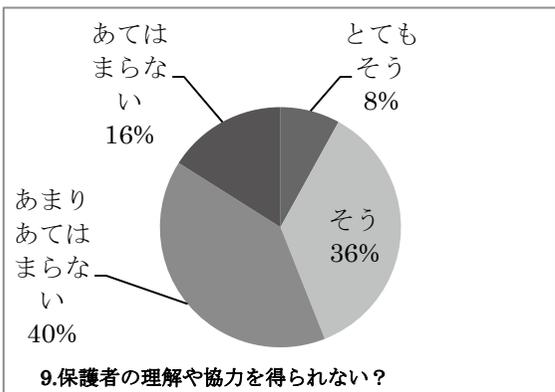


図 12

9つの設問について、比較したものが図13、表3である。以下の通り、子どもたちの状況として、「生活リズムの乱れ」(3.16)を保育者が一番深刻な問題として感じていると分かった。次に「進んで運動する」(3.12)、「姿勢保持できない」(3.12)、「子どもの二極化」(3.08)、「疲れやすい」(3.08)と続く。子どもたちが進んで運動する姿がある一方、姿勢保持できない子どもや活発な子どもと不活発な子どもの二極化が進んでいるということが分かった。

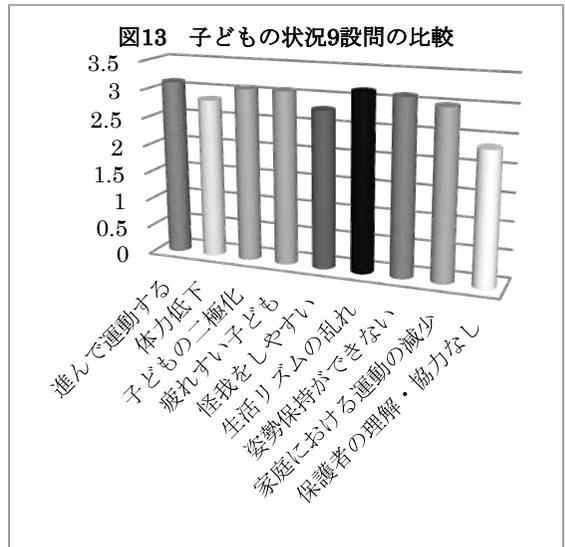


図 13 子どもの状況9設問の比較

表 3

設問	平均(4段階)
1 進んで運動する	3.12
2 体力低下	2.84
3 子どもの二極化	3.08
4 疲れやすい子ども	3.08
5 怪我をしやすい	2.8
6 生活リズムの乱れ	3.16
7 姿勢保持ができない	3.12
8 家庭における運動の減少	3
9 保護者の理解・協力なし	2.36

一方、家庭との連携については、「家庭における運動の減少」(3.00)を感じているものの、「保護者の理解・協力なし」(2.36)と感じてはならず、保護者の理解や協力が得られているということが分かった。

「生活リズムの乱れ」や「姿勢保持」の問題、運動する子どもとしない子どもの「子どもの二極化」について、保育を目指す学生たちにしっかり伝えていくべき現状である。特に生活リズムの乱れは、生活の根本であり、家庭の協力なしでは解決し得ない問題である。園で「遊ぶ」→家庭で「食べる」「眠る」→園で「遊ぶ」という好循環を作り出すことが運動、健康の源であることを学生自身の健康も含めて伝えていくことが欠かせない。

表 4

	日々感じること	勤務先	経験年数	クラス	
1	姿勢保持できない すぐに疲れる	公	幼稚園	2年目	5歳児クラス
2	ボールの投げ方・捕球。走り方、体支持力。体力測定を2回実施、その子なりの成長は見られますが、昭和の時代と子どもの姿は変化していると感じます	公	幼稚園	11年目	4歳児クラス
3	何もないところで激しく転んだり、転んでも受け身がとれず、頭・顔に怪我をする。 握る力も弱く、鉄棒など、長くつかめなかったり、勢いで離してしまう。	公	幼稚園	13年目	5歳児クラス
4	戸外あそびの経験が少なく、習い事に偏っている。	公	幼稚園	14年目	3歳児クラス
5	腹筋力や腕の力が弱く、滑り台の階段を登ることやジャングルジムを諦めてしまう。	公	こども園	4年目	0・1歳クラス
6	バランスが悪い。運動面が全て苦手なのではなく、でこぼこ道、梯子渡り、ボール投げなどのある分野が低い。	公	こども園	13年目	5歳児クラス
7	乳児でも姿勢の悪い子が目立つ	公	こども園	20年目	1歳児クラス
8	疲れたと口にする子が多い。	公	こども園	不明	5歳児クラス
	両足ジャンプが難しい。				
	座る時の姿勢が悪い。				
9	すぐに寝転がろうとする子が多い。	私	幼稚園	4年目	4歳児クラス

(3) 保育者が日々感じていること

次に、子どもたちの体を動かして遊ぶ様子や運動能力について、日々思うことを自由記述で回答してもらった。それをまとめたものが表4である。

表4のように、長年保育をしている保育者が感じる子どもたちの心配な状況があった。特に、自分で自分の体を十分支えられない子どもや滑り台や鉄棒を諦めてしまう子どもたちなど、心配な姿が報告された。また疲れやすい、怪我をしやすいなどの記述もあり、こういう現状があることを保育者や保護者、これから保育者になる学生たちが知っておく必要がある。学生たちは、このような現状がある中で保育者として、子どもたちの遊びを考え、支えていかなければならない。

(4) 幼児期運動指針実践状況

幼児期の運動指針の実践状況について、各設問の結果をグラフにまとめた。

図14、15のように、設11「幼児期の運動指針について、園内で話題にすることがありますか?」には、68%が話題にしてないと回答し、設問12「幼

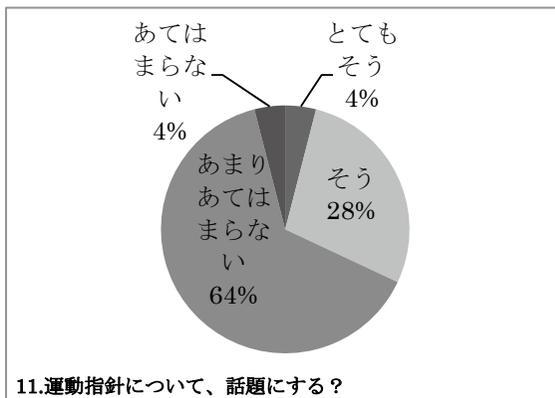


図 14

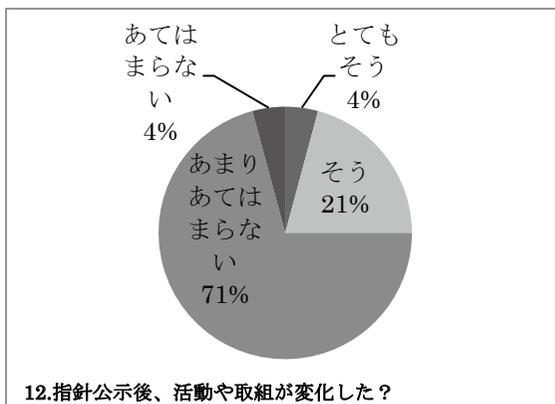


図 15

見期の運動指針が出たことによって、園の活動や取り組みは変わりましたか？」にも75%が変わっていないと回答し、公示後も園の取り組みや活動に変化はなかったと分かった。

次に、幼児期の運動指針を踏まえ、図16のように設問13「幼児期運動指針にある毎日合わせて60分以上、体を動かす遊びを取り入れよう意識していますか？」には、74%の保育者が意識しているということが分かった。次に、図17のように、設問14「幼児期運動指針にある毎日合わせて60分以上体を動かす遊びを取り入れることができますか？」には、62%ができていると回答した。意識と実践には10%の差がある。この数値から、毎日60分以上体を動かす遊びを取り入れよう意識しているものの、実践することはなかなか難しいということが分かった。

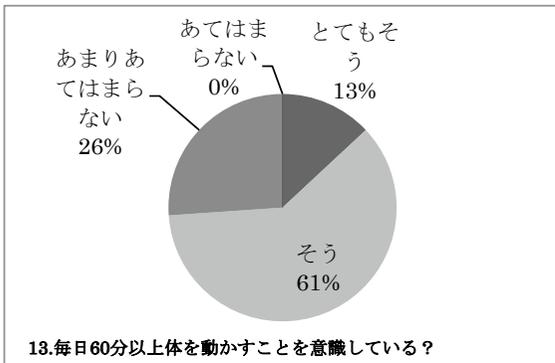


図 16

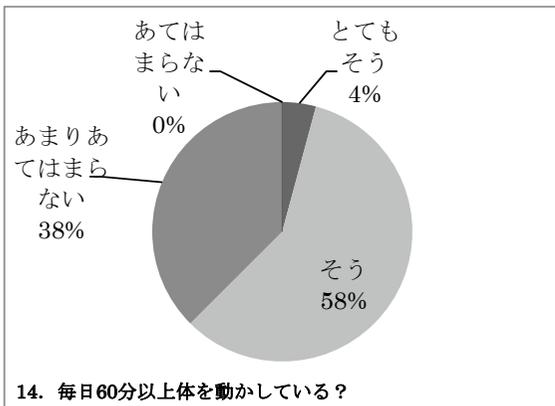


図 17

実践できない理由として、以下の回答があった(表5)。様々な行事が計画されている中、体を動かして遊ぶ時間を確保するのは難しい上、こども園が増加する中、保育時間に差がある子どもに対応していくことが求められている。また自由遊びの中で活発に体を動かす子どもとそうでない子どもがいる中、すべての子どもに目を向け、体を動かす十分な時間と経験を確保しなければならない。そのためには一人ひとりの遊びや動きを観察して分析するという保育者の見ることが必要になってくる。

そして実施方法について、図18のように、設問15「運動時間はまとめて行っていますか？分割して実施していますか？」には、52%がまとめて、35%が分けて実施していると回答した。それぞれの園の事情に合わせて、時間を確保していると推察でき、半数以上が体を動かして遊ぶ時間は遊ぶ時間としてまとめて取り入れていると分かった。

表 5

理由		勤務先	年数	クラス
・行事が多い	公	幼稚園	3年目	5歳児
・こども園なので、保育時間に差があったり、行事が重なったりする。	公	こども園	20年目	1歳児
・自由遊びの中で、体を動かす子とそうでない子がいる。	公	こども園	不明	5歳児
・活動が他にある	私	幼稚園	3年目	3歳児

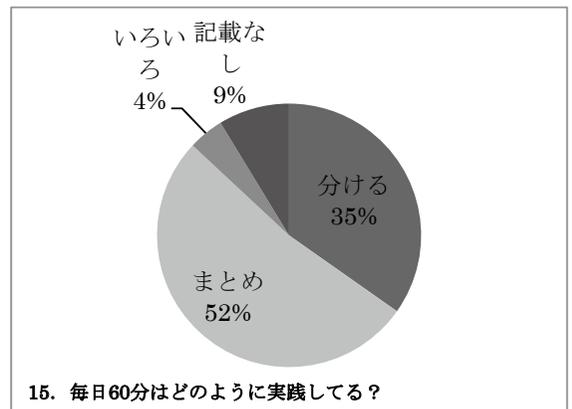


図 18

次に遊びの内容について、図19のように設問16「子どもたちがいろいろなあそびが経験できるように、意識しているいろいろなあそびを取り入れていますか?」は96%が、設問17「子どもたちが多様な動きが経験できるように、意識しているいろいろな動きを取り入れていますか?」には88%が、設問18「子どもたちが楽しく体を動かして遊べるように心がけていますか?」、設問19「子どもたちの発達に即した遊びを取り入れられるように心がけていますか?」には100%の保育者がそうであると回答した。幼児期の特性を理解し、遊びを組み立てていると考えられるが、多様な動きを取り入れようとする子どもたちに経験させたい「動き」に着目した保育の展開は他の項目よりは弱いと言える。

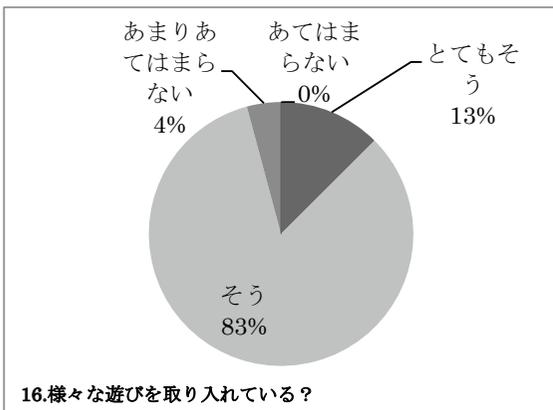


図19

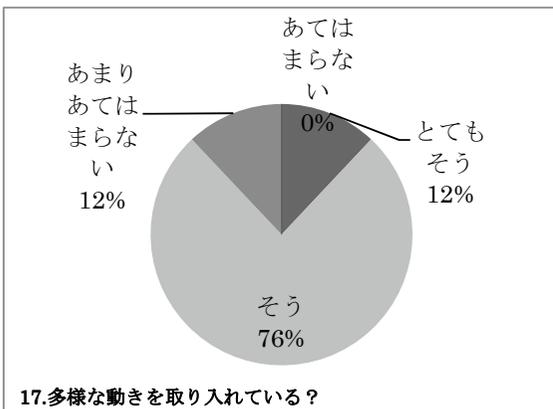


図20

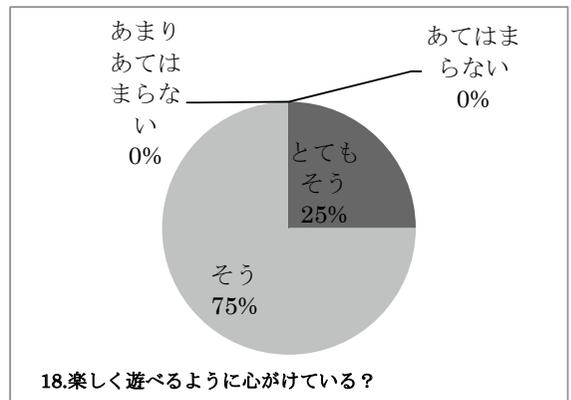


図21

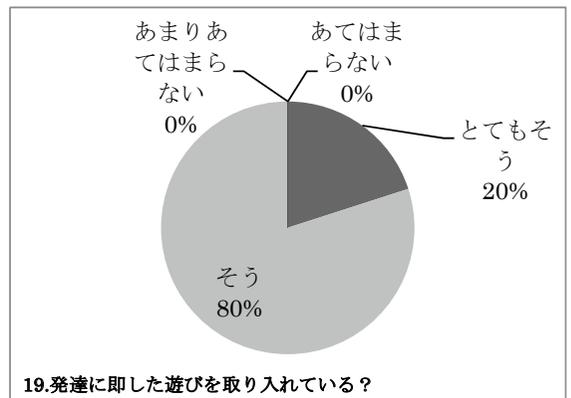


図22

安全については、図23のように100%安全を重視して活動を展開している。遊びの制限については、80%の保育者が安全のために遊びを制限することがあると回答している一方、20%は遊びの制限はあまりないとしている。危険なものすべてを大人が制限してしまえば、安全や危険を自分で守る力は子どもに育たない。どこまで制限し、どこまで制限しないのか、保育者は子どもたちの姿を見ながら、常に考えていかなければならないことを示している。

幼稚園・こども園における幼児の身体活動に関する研究

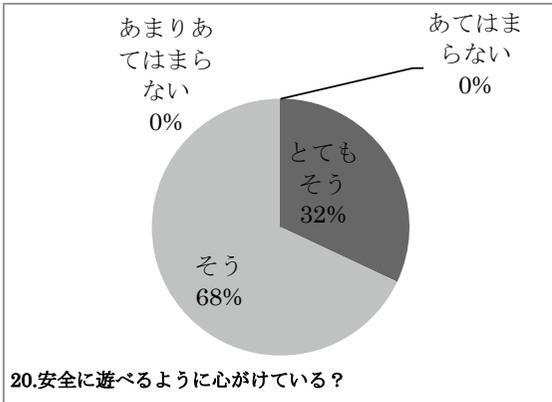


図 23

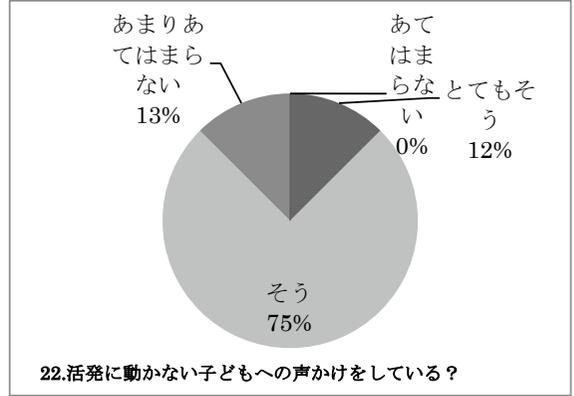


図 25

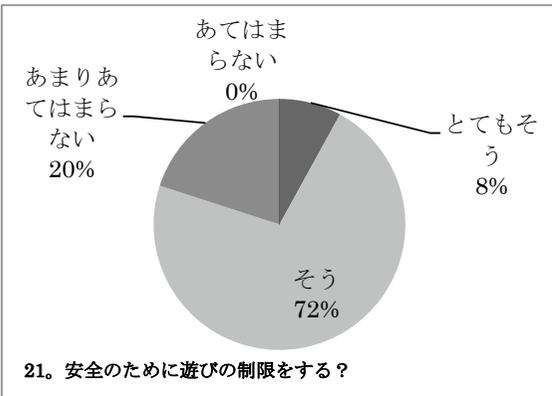


図 24

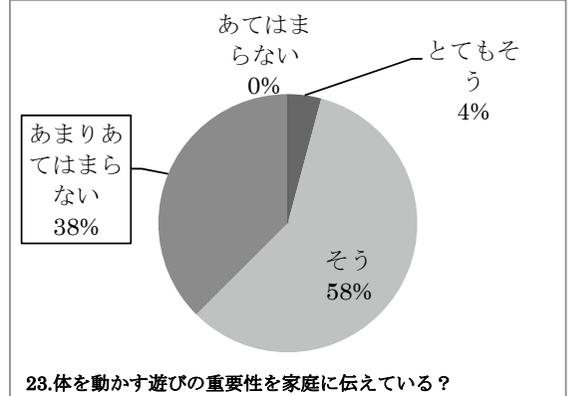


図 26

図 25 の通り、設問 22 「活発に体を動かさない子どもに対して、働きかけたり、声をかけたり、工夫していますか?」には 87% がしていると回答しているが、あまりあてはまらないと回答した保育者が 13% いた。設問 23 「体を動かさず遊びの重要性について、家庭に伝え、家庭で体を動かして遊べるように働きかけていますか?」は 62% がそうであると回答したが (図 26 参照)、38% の保育者があまりあてはまらないと回答している。家庭との連携をより高めるためにももっと積極的に園から発信していくことが必要であろう。

(5) 各園の取り組みについて

各園の取り組みを以下の表 6 にまとめた。

様々な運動動作が経験できるサーキットを決め

表 6

各園の取り組み				
1	園外のかげ足運動	公	幼稚園	1年目 3歳児クラス
2	朝サーキット遊び	公	幼稚園	3年目 5歳児クラス
3	チャレンジタイム(36基本動作を取り入れた遊びを日替わりで行っている。)	公	幼稚園	4年目 5歳児クラス
4	朝サーキット遊び(ジャンプ・パンチング・跳び箱)	公	幼稚園	10年目 4歳児クラス
5	体力測定を年2回実施。	公	幼稚園	11年目 4歳児クラス
6	運動器具を使ったでんぐり返し。跳び箱	公	幼稚園	13年目 5歳児クラス
7	忍者修行	公	幼稚園	14年目 3歳児クラス
8	柳沢運動プログラムを南足柄市で取り組んでいる。	公	幼稚園	25年目 4歳児クラス
9	みんなで体を使って遊ぶ時間や戸外で遊ぶ時間を設けている。	公	幼稚園	8年目 5歳児クラス
10	かけあしを毎日行ったり、基礎運動(ジャンプケンパ)を行っている。	私	幼稚園	5か月 3歳児クラス
11	毎日園の外周を声を出しながら行う。	私	幼稚園	5か月 4歳児クラス
12	体育クラブ プール	私	こども園	4年目 4歳児クラス
13	縄跳び マラソン(冬期のみ)	私	幼稚園	3年目 3歳児クラス

られた時間（朝など）に行うという園が複数見られた。「柳沢運動プログラム」や「基本動作を取り入れた遊び」などを運動プログラムを取り入れている園もあった。

これらの取り組みを4つの型にまとめた。

①サーキット型

自分のペースで周遊しながら、いろいろな動きを経験する。

②マラソン型

掛け声を掛けたり、園庭を楽しみながら走る。

③運動プログラム実践型

「35の基本動作を取り入れたあそび」や「柳沢運動プログラム³」など、子どもの発達に合わせて考案された運動プログラムを実践する。

④体力測定導入型

幼児の体力測定を実施する。子どもの体力について客観的データを取り、その学年の特徴や経年変化を分析し、それを保育に活かす。

表7

	取り組み	勤務先	年数	クラス	
1	跳び箱に力を入れている。走り方・まっすぐ走ることを運動の基本と捉えています。	公	幼稚園	2年目	5歳児クラス
2	小学校低学年でやる運動あそびを幼児向けにルールを優しくして取り入れている。	公	幼稚園	11年目	4歳児クラス
3	様々な動きを取り入れる。一緒に考える。	公	幼稚園	14年目	3歳児クラス
4	5歳児と1年生が関わる機会がある。	公	こども園	4年目	0・1歳児クラス
5	学年ごとに経験させたい内容や繋がりを捜索中。	公	こども園	20年目	1歳児クラス
6	チャレンジと称して、縄跳び、跳び箱、鉄棒をできるように手の力やジャンプ力を身に付けている。	公	幼稚園	25年目	4歳児クラス
7	小学校交流で、小学校の用具を借りて触れる。	公	こども園	13年目	5歳児クラス
8	鉄棒と縄跳びを取り入れた遊びを行っている。	私	幼稚園	25年目	主任

表8

	内容	勤務先	年数	クラス	
1	子どもたちが楽しく体を動かして遊べる環境設定、まんねりせずに変化、難易度を上げる工夫がアイデアが浮かばない場合があります。	公	幼稚園	11年目	4歳児
2	安全性。障害を持っている子も無理なく、楽しめるもの。	公	幼稚園	13年目	5歳児
3	時間・場の確保	公	幼稚園	14年目	3歳児
4	予想できない子どもの動きに対応できるような瞬発力	公	幼稚園	25年目	4歳児
5	コツが分からないことや自分も苦手なものを伝えるのに悩みます。	公	幼稚園	8年目	5歳児
6	保護者の理解(危険との声)	私	こども園	4年目	4歳児
7	恐怖心を持っている子。恐怖心の取り除き方	私	幼稚園	25年目	主任

(6) 小学校への円滑な接続にむけて

小学校への円滑な接続にむけて取り組んでいることについて、表7のようにまとめた。

小学校で出てくる種目や用具に慣れるように、遊びながら経験するなどの各園の工夫が見られた。また運動の基本となる「走行」、「様々な動きの経験」に重点をおいて取り組んでいる園もあった。生涯に渡って、運動できる土台や楽しい運動との出会いを幼児期に経験させたいと保育者が留意していると分かった。

(7) 体を動かすあそび実践上の課題や問題点

体を動かすあそび実践上の課題や問題点について、自由記述で回答してもらった。まとめたものが表8である。

《環境構成》として、1の「環境設定」や3「場の確保」など、「環境を通して行う教育」を実現

するために子どもたちが動きたい、やってみいたいという環境や場の設定の工夫が難しいとの声があった。いかに子どもの「やってみたい」を引き出すか、環境設定の重要性を示唆するものである。次に《子どもへの対応》として、2「障害を持っている子どもも無理なく、楽しめるもの」、4「予想できない子どもの動きに対応できるような瞬発力」、「恐怖心を持っている子。恐怖心の取り除き方」があった。統合保育が進んでいる状況や運動が得意な子、苦手な子が一緒に活動する保育現場において、様々な運動レベルの子どもが一緒に楽しみ、自分の能力に合わせて活動できることが大切であるということが分かった。また《自分自身の課題》として、1の「アイデアが浮かばない」や5「コツが分からないことや苦手なものを伝えるのに悩みます」など、保育者自身の課題があっ

た。保育者のアレンジ力や指導力が運動あそびの楽しさの重要な要素に繋がっていることを示している。ゆえに、研修会や研究保育などを通して、保育者が苦手意識を軽減したり、自身の保育の限界を突破できるような、常に刺激を受けて学び続ける環境やサポートが求められる。

6. 結論

本研究では、運動あそびの研修会に参加する25名を対象として、アンケート調査を行った。その結果、子どもたちの運動あそびの状況として、「生活リズムが乱れている」、「進んで運動する」、「姿勢保持ができない」、「活発な子どもと不活発な子どもの二極化」、「疲れやすい子ども」が多いということが明らかになった。自由記述でも「疲れやすい子ども」や「鉄棒や滑り台を諦めてしまう子ども」などの姿が報告され、このような現状をしっかりと受け止めて、保育を目指す学生たちに伝えていく必要がある。

次に、幼児期の運動指針については、あまり園で話題にされることはなく、園での取り組みに大きな変化はなかった。しかし、保育者が幼児期の運動指針のポイントをおさえた上で、子どもの育ちに必要な遊びを園でしっかり実践しているということが分かった。一方、幼児期の運動指針が示す「毎日60分以上」の体を動かす時間を持つという目標を7割の保育者が意識しているものの、達成できている者は6割に留まった。様々な行事がある中で、毎日60分以上身体を動かす時間を確保することは難しいということが明らかになった。限られた時間の中で、いかに体を動かして遊ぶ時間を確保していくのか、その難しさや工夫について保育者も研究者も考えていく必要がある。また体を動かす遊びの重要性について、家庭に伝え、家庭で体を動かして遊べるように働きかけているか

という設問には、約4割の保育者ができていないと回答した。園以外での降園後や休日に体を動かす時間を持てるように、家庭への発信の強化と工夫が課題である。

本研究対象者は、幼児期に必要な運動について十分理解し、子どもの育ちに必要な遊びを園で実践していた。しかし、子どもたちにどのような動きを経験させたいか、どのような動きの経験が少ないか、運動動作からの視点が他の項目に比べて弱かった。子どもたちの動作に注目し、子どもたちに必要な遊びを組み立てられるように、養成校の時に、自分が実践しようとしているあそびには、どのような運動動作が含まれ、どのような動きの経験となるか、運動あそびを分析する目を養っていく必要がある。

また小学校への接続について、小学校で出てくる種目や用具に慣れるように遊びながら経験するなどの各園の工夫や取組みがあった。小学校で行われる種目には、マット運動や鉄棒、跳び箱など、動きの習得や経験が必要なものがある。いきなり難しい動きに進むと、「できない」という苦手意識を持ち、体育が嫌いになってしまう恐れがある。運動の習得は、易しい動きから難しい動きに段階的に進んでいくことが基本である。本研究で報告された各園の取り組みのように、小学校以降どのような種目があるのか、小学校以降の学習指導要領にも目を通し、それらを見通した上で、動きの育ちにおける小学校へのスムーズな接続を図ることができる保育者を育てる授業を展開していくことが大切である。

7. 今後の課題

本研究対象者数は25名と限られたものであった。引き続き、多くの保育者を調査する必要がある。また公立の保育者が多かったことから、私立

の保育者との比較なども考えていかなければならない。そして、幼児の体力テストを導入している園もあったように、保育者の主観ではなく、客観的視点で子どもたちの動きの育ちを捉え、それを保育の立案に活かしたり、結果を家庭に伝えて家庭での過ごし方の見直しに繋げてもらう幼児の体力テストの導入や活用を検討していきたい。

ガイドーよくわかる!今すぐはじめる!」杏林出版
・田中沙織 (2017)「保育の振り返り記録からみる幼児の基本的運動動作について」日本保育学会第 70 回発表要旨集 p.943

・岩室駿介・赤塚尚子・上平伸也 (2017)「幼児体力テスト結果を活用した運動遊びに関する実践報告」日本保育学会第 70 回発表要旨集 p.1086

【注】

- ¹ スポーツ庁「平成 28 年度体力・運動調査結果の概要及び報告書について」http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/29/10/1396996.htm
- ² 前掲 調査結果の分析「幼児期の外遊びと小学生の運動習慣と体力との関係」p.15
- ³ 松本短期大学名誉教授である柳沢秋孝氏が 38 年間 2 万名以上の子どもたちに運動あそびを直接指導し、考案した運動プログラム。

【引用文献】

- ・スポーツ庁「平成 28 年度体力・運動調査結果の概要及び報告書について」
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/29/10/1396996.htm
- ・田中沙織 (2010)「幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第 59 号 P.161-166

【参考文献】

- ・文部科学省 (2013) 幼児期の運動 幼児期運動指針 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/index.htm
- 文部科学省 (2013)
・「幼児期運動指針ガイドブックー毎日、楽しく体を動かすために」
- ・日本発育発達学会 (2014)「幼児期運動指針実践

Research on Young Children's Physical Activity in Kindergartens and Daycares

Ayaka TAGO

【abstract】

A questionnaire survey conducted among participants in an exercise-play workshop revealed the actual situation of children's physical activity and implementation of early childhood exercise policies in kindergartens and daycares. I consider about the course content of classes addressing physical activities in training schools to aim at the dissemination and implementation of early childhood exercise policies.

【key words】

children's physical activity, childcare content“health”, childcare training

